

【全体概要】 県産大豆の主力品種である「フクユタカ」は早播きでは倒伏や青立ちが懸念されるため、7月以降の播種が中心となっている。しかし、この時期は梅雨と重なるため、長雨による播種遅れや播種後の湿害が深刻な問題となっている。そこで「フクユタカ」よりも早期に播種を行うことで、リスク分散ができる品種の導入を検討する。

新品種・新技術等の概要

導入を検討する「里のほほえみ」と「サチユタカA1号」の2品種については、「フクユタカ」より早播き適性があり、作期分散が図れることと、他県で導入実績があり実需者からも一定の評価があるため選定した。「里のほほえみ」「サチユタカA1号」共に、「フクユタカ」と比べて早生品種で耐倒伏性や難裂莢性に優れており、多収が期待できる。両品種は令和元年度の三重県農業試験場内等での試験の結果、県内における早播適性について確認された。



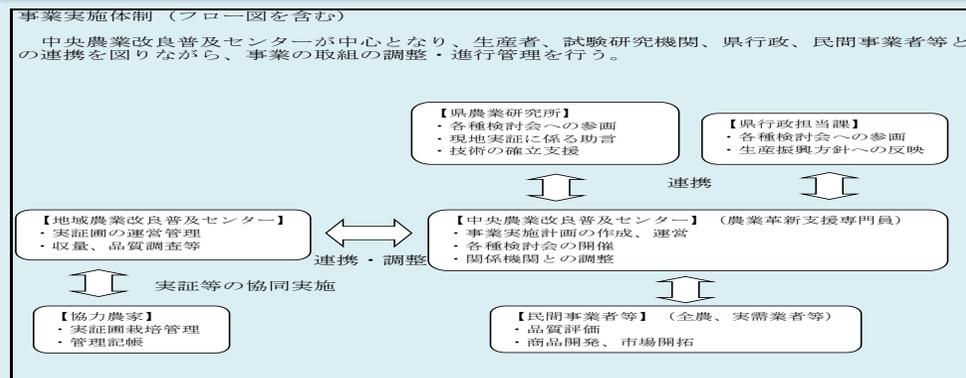
開花期頃（7月末）の「里のほほえみ」（左）と「サチユタカA1号」（右）の姿。
両品種とも播種は6月中旬
（農業研究所内圃場：松阪市）

主な取組内容

県内の各地域で現地試験を実施し、新品種導入に向けて検討を進めた。この際、昨年の実証圃の試験結果をもとに、県内各地域での播種時期や栽植密度についても実証を行い、普及に向けて品種の特性把握に努めた。また、産地および実需者との意見交換や意向把握を行うための検討会を開催し、新品種導入に向けて機運を高めた。



実施体制図



課題と今後の対応

県内の5地域普及センター及び農業研究所内に7か所の実証圃を設置し、作期反応、収量性、品質、病害等の耐性や害虫の発生状況等を調査した。加えて、農業研究所内圃場においては、栽植密度に関する試験も実施した。

また、収穫物を用いて成分分析を行うとともに、協力実需者による加工適性試験を実施した。

1年目の実証結果から、供試した2品種の早播き適性や収量性、品質等について把握することができた。

更に、早播きに起因すると考えられる害虫の多発や雑草の繁茂等の課題も明らかとなった。

2年目については、実証か所数を増やし、年次変動を確認するとともに、害虫対策等を万全にした上で、栽培方法を整理し次年度以降の導入に向けた新品種の栽培法の確立を行う。